紀要『Core Ethics』

院生の多様な研究成果を発信しています

（外部審査員による査読付き雑誌）

連関する研究教育プログラム

先端総合学術研究科の教育と研究プロジェクトは、GOOD PRACTICE ―文部科学省が推進する大学院教育の優れた取り組み（2006 年）やグローバル COE プログラム―国際的に卓越した教育研究拠点の形成の重点的支援（2007-2011）として採択されています。

2 つのグローバル COE プログラム

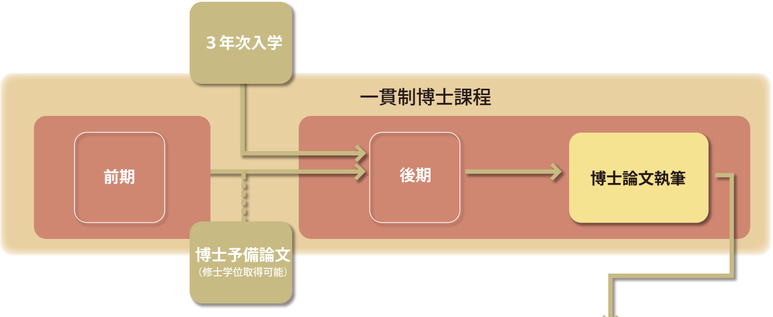
・「生存学」創生拠点―生老病異と共に暮らす世界へ―
中核となる研究科＝先端総合学術研究科

・日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点
中核となる研究科＝文学研究科／理工学研究科／政策科学研究科／先端総合学術研究科

これまでの博士論文例

2009年度分＋2010年度12月提出分まで（15本）

「重症新生児の治療方針決定における合意形成に関する研究」
「衡平性の経済哲学 ――社会保障制度における分配ルールの設計」
「ガブリエル・タルドにおける社会学理論と経済心理学に関する研究」
「企業の社会的責任論 ――擬人化の論理と責任の形式に関する企業の倫理学」
「レイプで妊娠した被害者女性の産む・産まない ――インタビュー調査から」
「戦前中国の日本人学校出身中国人による 同窓生ネットワーク構築に関する歴史社会学的研究」
「日常生活世界における自殺動機付与活動の知識社会学 ――自死遺族らによる動機付与のポリティクスと常識知／専門知」
「「若者の労働運動」の社会学的考察」
「ヴェトナム戦争の初期報道における日本のジャーナリズム」
「日本の地方衛生行政における試験検査部門の導入と展開」
「日本土木建設業の近代化と「朝鮮人」労働者の移入――植民地鉄道建設における「朝鮮人」工夫雇用の技術史的考察」
「障害当事者運動の検討 ――大阪青い芝の会の運動を事例として」
「障害者雇用における合理的配慮 ――経緯と日本への導入視点」
「日本における生体肝移植の普及過程 ――生体肝ドナーが生み出された歴史的背景と問題点」
「顧みられない熱帯病<ブルーリ潰瘍問題>に対する感染症対策ネットワーク構築と小規模NGOの役割」



院生のための奨学金・研究活動助成制度

・立命館大学西園寺大学院進学奨励奨学金
・立命館大学大学院特別奨励奨学金（S・A・B）
・立命館大学大学院特別育英奨学金（S・A・B）
・立命館大学大学院学生学会発表補助金
・立命館大学大学院博士課程後期課程
研究奨励奨学金（S・A・B）
・クレオテック大学院私費留学生奨学金
・立命館大学大学院博士課程後期課程
国際的研究活動促進研究費
・立命館大学大学院博士課程後期課程
学生学会発表補助金
・先端総合学術研究科出版助成制度
・先端総合学術研究科
調査研究プロジェクト支援助成金
・立命館大学グローバル COE「生存学」
創成拠点における各種研究活動助成制度

※先端総合学術研究科の学生が利用できる支援制度の一部です。制度は変更される場合があり、詳細は、入学手続き時または入学時に説明します。

※立命館大学大学院生に対する奨学金・支援制度の概要
http://www.ritsumei.jp/grinfo/grinfo04_j.html

研究者としてのキャリアパス支援

・研究科修了後のキャリアパスとして、立命館大学衣笠総合研究機構などのポストドクトラルフェローに申請することができます（本研究科修了生の 2011 年度分の合格者は 3 名）

・本研究科独自のキャリア・パスとして、研究指導や関連業務を行う研究指導助手制度があります。

・日本学術振興会特別研究員にも多くの採用者がいます。

2007 年度	DC8名＋PD1名
2008 年度	DC5名＋PD1名
2009 年度	DC5名＋PD2名
2010 年度	DC9名＋PD1名
2011 年度	DC4名＋PD3名

博士論文など研究から書籍刊行へ

今井真理『芸術療法の理論と実践』（2007）
福田知子『詩的創造の水脈』（2008）
田島明子『障害受容再考』（2009）
川口有美子『逝かない身体』（2009）
（第 41 回（2010 年）大宅壮一ノンフィクション賞受賞）
吉村夕里『臨床場面のポリティクス』（2010）

先端総合学術研究科の多様な入試方式を紹介します

個性あるお研究戦略をもった新しいタイプの研究者を養成するために、先端総合学術研究科は、さまざまな入試方式を設定しています。以下に入試要項の抜粋を掲載しますので、自身の研究スケジュールをにらみながら、果敢にアタックしてください。
入学定員は全体で 30 名です。各入試方式はその募集人数を越える合格者数になることがあります。なお、受験資格や実施時期を詳細に定めた入試要項については、必ず最新のものを大学院課に請求して下さい。大学院受験生の方への WEB ページ http://www.ritsumei.jp/gr/index_j.html からも申し込みできます。

一般入学試験（募集人数 10 名）

■**選考方法**
①筆記試験
論文　公共・生命・共生・表象の 4 つの領域から 1 つを選択
外国語　英語（但し英語以外の外国語での受験を希望する場合には出願開始日までに独立研究科事務室に相談のこと）
※辞書持込可（辞書機能付電子手帳等の電子機器類は不可）
②面接

■**出願書類**（入学検定料納入の上、下記書類を一括して提出してください。）
①各入試方式共通
入学志願票（本学所定用紙）
研究計画書（本学所定用紙　2,000 字程度）
年次計画書（本学所定用紙）
②最終学校の成績証明書および卒業（見込）証明書
③卒業（演習）論文の概要：必須ではありませんが、卒業論文を提出、または提出予定の場合は参考資料として提出してください。

自己推薦入学試験（募集人数 5 名）

■**選考方法**
①書類選考
②面接

■**出願書類**（入学検定料納入の上、下記書類を一括して提出してください。）
①各入試方式共通（一般入学試験を参照）
②最終学校の成績証明書および卒業（見込）証明書
③自己推薦書（本学所定用紙　様式 3）及び関連資料
④自由テーマ論文（2000 字程度）

社会人自己推薦入学試験（募集人数 5 名）

■**選考方法**
①書類選考
②面接

■**出願書類**（入学検定料納入の上、下記書類を一括して提出してください。）
①各入試方式共通（一般入学試験を参照）
②最終学校の成績証明書および卒業（見込）証明書
③自己推薦書（本学所定用紙　様式 3）及び関連資料
④自由テーマ論文（2000 字程度）
⑤履歴書

飛び級入学試験（募集人数 若干名）

■**特記すべき受験資格**：本学及び他大学の 3 回生在学生で、次のすべての要件を満たす者。
①3 回生終了時に卒業必要単位を 110 単位以上修得していること。（出願時には見込み可）
②外国語の卒業必要単位を満たしていること。（出願時には見込み可）
③3 回生までの学部の卒業要件科目の GPA が 3.60 以上＊の者。（出願時には見込み可）＊GPA（GRADE POINT AVERAGE の略）の算出方法については独立研究科事務室にお問い合わせください。

■**選考方法**
①筆記試験
論文　公共・生命・共生・表象の 4 つの領域から 1 つを選択
外国語　英語（但し英語以外の外国語での受験を希望する場合には出願開始日までに独立研究科事務室に相談のこと）
辞書持込可（辞書機能付電子手帳等の電子機器類は不可）
②面接

■**出願書類**（入学検定料納入の上、下記書類を一括して提出してください。）
①各入試方式共通（一般入学試験を参照）
②成績証明書

外国人留学生入学試験（募集人数 若干名）

■**特記すべき受験資格**：次の①②のいずれかの要件を満たし、かつ、講義を理解できる程度の日本語能力を満たす者。
①外国において日本の学校教育における 16 年の課程に相当する課程を修了した者、または今年度 3 月までに修了見込みの者。
②留学生の在留資格で日本の大学を卒業した者、または卒業見込みの者。

■**選考方法**
①書類選考
②面接

■**出願書類**（入学検定料納入の上、下記書類を一括して提出してください。）
①各入試方式共通（一般入学試験を参照）
②入学資格に関する学校の卒業（見込）証明書
③最終学校の成績証明書
④卒業論文の概要（必須ではありませんが、卒業論文を提出、または提出予定の場合は参考資料として提出してください。）
⑤立命館大学大学院入学願書（本学所定用紙）

学内進学入学試験（募集人数 10 名）

■**特記すべき受験資格**：立命館大学各学部 4 回生以上（＊）に在籍し今年度末に卒業見込の者もしくは今年度 9 月卒業の者で、成績基準のすべてを満たす者。
（＊）5 回生以上の者については標準修業年限での卒業とならなかった理由（アメリカン大学との共同学位プログラムへの参加や留学等）について 400 字程度の理由書（様式自由）を提出してください。
①前年度終了時までに取得した単位が 110 単位以上の者。
②GPA が 3.40 以上の者。GPA（GRADE POINT AVERAGE の略）の算出方法については独立研究科事務室にお問い合わせください。

■**選考方法**
①書類選考
②面接
詳細は受験票送付の際に通知します。

■**出願書類**（入学検定料納入の上、下記書類を一括して提出してください。）
①各入試方式共通（一般入学試験を参照）
②成績証明書および卒業見込証明書
③卒業（演習）論文計画書
必須ではありませんが、卒業演習に相当する科目の履修者は参考資料として提出してください。

3 年次転入学試験（募集人数 若干名）

■**特記すべき受験資格**：国内および外国において、修士の学位もしくは専門職学位を有する者または本研究科に入学までに授与される見込みの者。

■**選考方法**
①論文　修士論文またはそれに相当するもの、および研究計画書をもってこれにあてます。
②面接　論文と入学後の研究計画について試問します。

■**出願書類**（入学検定料納入の上、下記書類を一括して提出してください。）
①入学志願票（本学所定用紙）
②研究計画書（本学所定用紙　2,000 字程度）
③最終学校の成績証明書および修了証明書または修了見込証明書
④修士論文（またはそれに相当する研究実績）およびその概要（2,000 字程度）
修士論文等の他に別の論文を提出し、審査の対象とすることができます。9 月実施入学試験において、修士論文を執筆中の場合にはその概要（2,000 字程度）を提出してください。

いずれの試験においても試験場は、衣笠キャンパスです。

〈問い合わせ先〉立命館大学独立研究科事務室　tel 075-465-8348
〈入試要項請求先〉立命館大学大学院課　tel 075-465-8195
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1　ホームページ http://www.ritsumei.jp

RITSUMEIKAN

人類の課題に新たな〈知〉をもって挑む

Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences

「核心としての倫理」（Core Ethics）を軸に、
公共、生命、共生、表象の四つのテーマのもと、
新しい研究領域を創出します。

立命館大学大学院　先端総合学術研究科

http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsce/

先端総合学術研究科の理念
――ディシプリンからテーマへの転換

日本の大学制度は今、近代化の初期に大学が創設されて以来、もっとも大きな変革の時代に直面している。学部から大学院までの教育研究システム全体が、国際的な水準を視野に入れた根底的な見直しをせまられている。高度な専門職技能の養成と、新たな時代の問題に取り組む研究者の養成がもとめられているのである。この新たな時代の研究者の養成に向けて立命館大学が提起するのが先端総合学術研究科の構想である。

基本的に学部の上に置かれた現在の大学院は、明治以来の近代的学問体系にのっとったディシプリン、すなわち専門分野の区分に基づいて構成されている。先端総合学術研究科は、20 世紀から今世紀に引き継がれた新たな質の、先端的なテーマに取り組む研究者の養成のために、特定学部を基礎とするのではない独立研究科とした。独立研究科としてディシプリンの総合化をはかり、また、研究所・センター群との連携によるプロジェクト研究における教育によって、大学院教育と先端的で総合的な研究との緊密な結合を実現することを基本的な狙いとしている。（2003 年先端総合学術研究科開設文書より）

一貫制のプロジェクト型大学院
――――ディシプリンからテーマへの転換

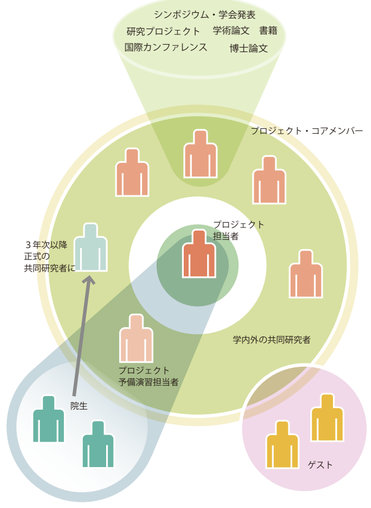
1 st stage
多様なプロジェクトが織りなす新しい大学院教育それ自体が一個の壮大なプロジェクトです。

立命館大学の研究所・センター群は、これまでもプロジェクト研究によって多くの成果を上げてきました。こうしたプロジェクト研究を大学院教育に結びつけることは、それ自体がひとつのプロジェクトといっても過言ではありません。

プロジェクト型の教育・研究システムは、テーマごとの合同研究会や個別のプロジェクト、院生それぞれの課題に応じたフィールド調査、メディア制作などを通じて、新たな研究の潮流を生み出すことを目標とします。また研究会は専任スタッフを中心に学内外の第一線の研究者たち、さらにそのときどきのゲスト参加者を交えて開催され、研究ネットワークを形成します。

院生は、1、2年次には研究の基礎的な力を身につける勉強をしながら、こうした研究会や個別プロジェクトに準メンバーとして参加します。1、2年次に開設されるプロジェクト予備演習は、研究会やプロジェクトの各テーマに密接に関連して、テーマごとの基礎的な研究手法を身につける科目です。2年次後期にはプロジェクト担当者自身が担当するプロジェクト予備演習で、博士予備論文の仕上げに専念します。博士予備論文は、プロジェクト研究に正式に共同研究者として参加するための資格審査の材料となります。

博士予備論文の審査に合格すると、その学生はもはや準メンバーではなく正式な共同研究者として、プロジェクト研究そのものの運営にあたって中核的な役割を果たすことになります。すなわち、計画的に研究を推進する日々の活動の一翼を担いつつ、研究会や学外の諸学会等における成果発表を着実に積み重ねていくことになるのです。



2 nd stage
4つのテーマ領域と12人の専任スタッフがディシプリンを超えて新しい研究領域を創出します

個人個人の日常的な生き方から、国家や共同体レベルの政策決定まで、さまざまな次元を視野に入れながら、わたしたちは、コア・エシックス（核心としての倫理）にふれる4つのテーマを選びました。そして、テーマごとに「科目としてのプロジェクト」が設置され、さらに各教員が中心になって運営する「個別プロジェクト」が設けられるのです。

天田城介
社会学

後藤玲子
経済学

立岩真也
社会学

公共　21世紀における公共性

国民国家の法的擬制である公／私の境界の変容過程をたどり、分配的正義および経済システムの問題を視野に入れながら、国民国家に変わるシステムの可能性を探ります。

社会／社会的なものの原理的解明――天田城介

社会学を基礎として天田が中心となって、〈社会〉あるいは〈社会的なもの〉の原理的・理論的な解明を試みる。19 世紀における〈社会〉ないしは〈社会的なもの〉が迫り出していく歴史的・時代的ダイナミズムとその政治経済的な存立条件を探求することを通じて、戦前・戦後の日本社会における〈社会〉ないしは〈社会的なもの〉を解読していく。特に、近代日本社会における社会政策とりわけ高齢者関連政策に照準した上で、現代における福祉国家の批判的検討とその理論的考究を行うものとする。換言すれば、「なにゆえに、いかにして、脆弱な人びとを我々は生かそうとするのか／生かそうとしないのか」という最も大きな問いに対して何らかの回答を与えることこそが、ここでの最大の目的となる。

現代民主主義の経済学的条件――後藤玲子

経済学を基礎として後藤を中心に、民主主義の経済的前提を明らかにする。価値の多元性を特質とする現代社会は、諸個人を政策の意思決定主体として扱う仕組みを民主主義システムとして用意している。だが、そのことは人々の私的利益に基づく選好をそのまま尊重することを意味するものではない。諸個人が主体的に、政策評価に相応しい公共的・不偏的な判断を形成するためには、多様な個別的状況にある人々に及ぼされる影響を考慮し、道理ある複数の価値判断の両立可能性を探ることが必要となる。私的な利益や個人的な価値判断を相対化するような機会（公共的討議の場）と情報の、制度的および主体的条件を探求する。

平等と自由／自由の平等――立岩真也

社会学を基礎として立岩が中心となって、公共性の基礎としての分配あるいは自由等、原理的なレベルから理論構築をこころみる。「分配的正義」については、厚生経済学とその批判的な展開、政治哲学における論争、アナリティカル・マルキシズムと呼ばれる陣営に属する人たちの主張等を読解していく。その上で、いかなる財の配置のあり方が望ましく、また可能なのかを考える。そして、分配的正義の問題における自由、帰属、承認について考察する。

遠藤彰
生物学・環境論

小泉義之
哲学・倫理学

松原洋子
科学史・科学技術論

生命　争点としての生命

近年のゲノム分析の進展、生命操作をめぐる新しい事態、自然破壊の急速な進行…、などが投げかける倫理的諸問題を整理して、新しい生命・環境の理解と表現の可能性をひらきます。

生命と環境の現在と未来――遠藤彰

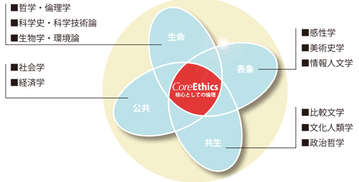
生物学・生態学及び生態学史を基礎に、遠藤が中心になって、環境保全や環境評価、さらに「環境倫理」の背後にある環境概念を再検討し、また、個体の「生命論」にとどまらない、生物多様性を含めた自然すなわち生態的複合体を理解する新たな認識を探求する。そして、持続可能な社会生態システムの諸条件を解明するための基礎的な研究法を探求する。

生命論の理論的争点――小泉義之

哲学・倫理学を基礎に、小泉が中心となって、近現代において生命と生物が理論的にどのように認識され、文化的にどのように表象されてきたのかを整理して、新しい生命論を展望する。また、現代生物学がいかなる理論的課題に直面し、現代文化がいかに生と死を表象しているかを整理し、生命と生殖と病と死について総合的に探究する。そして、現代的な生物観ひいては人間観を構築することを目標とする。

生命と技術の倫理――松原洋子

科学史・科学技術論を基礎に、松原が中心となって、生命科学・医療・福祉に関する科学的知識および科学技術をめぐる諸問題について広範な資料収集をおこない、的確な研究法を探求する。個体レベルでの生命の保持や能力の増進、次世代に関わる生殖や出生の管理、個体間での生体組織・機能や情報の交換、個と全体の関係が問われる人口・生態系・進化など、様々な位相に注目しながら、科学と技術の抱える問題を、整理・検討する。そして、こうした問題に接近するための生命論と、あるべき新しい倫理の構築をこころみる。



P・デュムシェル
政治哲学

西成彦
比較文学

渡辺公三
文化人類学

共生　共生の可能性と限界

多大な犠牲をともなう不完全な共生実験であった人間の歴史を批判的に遡りつつ、未来に向けて、そうした犠牲を伴わない生命と生活の可能性を構築する方途を探ります。

市民社会は共生のモデルとなりうるか？――P・デュムシェル

政治哲学を基礎にデュムシェルが中心となって、市民社会の起源と構造を論じたさまざまな社会、政治哲学の再検討をおこなう。西洋のそれぞれの国民的伝統のなかで市民社会が形成され、また、この社会の原理を根拠づけるさまざまな哲学の流れが生み出されてきた。市民社会においては、欲望を実現する主体としての市民を前提として、市民が契約し、経済システムを構成し、社会を民主的に運営するとされるが、欲望はどのように構成されるのか、欲望と経済システムの関係はいかなるものか、そうした基本的な視点から、そこに含まれた「普遍的」とされる原理の可能性と限界を問い直す。

現代世界における言語の多層化と複数言語使用――西成彦

比較文学を基礎に西が中心となって東欧文学作品および英米文学作品を中心とするテキストのなかに多声・混声的な響きを聴き取り、あるいは他者の声が隠蔽されていく軌跡をたどりなおす。複数言語使用はかならずしも現代に限られた話ではないが、植民地主義や国民国家の言語政策によって加えられた圧力がその形態に大きな変更をせまり、さらにグローバリゼーションやボーダレスな人口移動が新しい諸言語間の隣接関係を開こうとしている。こうした歴史を踏まえてテキストの読みを再構築する。

土地をめぐる法体系の葛藤と共生――渡辺公三

文化人類学を基礎に渡辺が中心となって、文化人類学のこれまでの蓄積を生かし、他のディシプリンからの吟味を加えて、共生の可能性と限界を検討する視点を形成する。とりわけ過去から現在まで、生活の場である土地との関係において、伝統と近代が葛藤と軋轢を生じた、あるいは現に生じている事例―― 一般的には広義の土地所有権をめぐる係争―― を中心に検討を進める。果たして近代的法―権利の体系を越える共生の原理は成り立ちうるのか、こうした問題に、いわば共生の対極ともいえる事態を起点として接近することがこの研究の狙いであり、特徴的な視点である。

CoreEthics

上村雅之
情報人文学

島田康寛
美術史学

吉田寛
感性学

表象　文化と芸術の表象論的分析

文化と芸術の諸事象を表象論的観点から読解・分析します。技術、歴史、思想、実践への理解を主軸とし、創造と受容の場、諸々の文脈、メディアといった問題系へとアプローチします。

デジタルエンターティンメント――上村 雅之

情報人文学を基礎に上村が中心となって、近年拡大の一途をたどるデジタルエンターティンメント領域に切り込む。とりわけ日本が世界をリードする「ビデオゲーム」という文化とそれが持つ「遊戯性」に着眼し、「遊戯としてのビデオゲーム」をテーマにプロジェクト型研究を展開する。このプロジェクトでは、情報工学、美学・芸術学、音楽学、心理学、社会学、歴史学、経営学などをはじめとするあらゆる学問領域と連携しつつ、ビデオゲームの学術研究という新たなフィールドの構築をこころみる。

美術史の再構築――島田康寛

美術史学を基礎に島田が中心となって、歴史や文化、文学、思想などさまざまな隣接する学問を活用しこれと関わりながら、従来 の美術史で取り上げられてきた対象については新資料の調査、発掘を試みて再考することはもちろん、それらの周辺において未だ手付かずの問題として放置されている領域についても新たに研究対象として取り上げ、これらを総合することにより、人間学としての新たな総合的美術史の構築を試みる。方法としては、先行研究を十分に理解しつつも、それらの研究に囚われることなく、自己の感性を可能な限り駆使して独自の思考を展開する場としたい。

感性論・感覚論の歴史と現在――吉田寛

感性学を基礎に吉田が中心となって、感性論・感覚論の歴史と現在について批判的考察を重ねながら、表象研究の理論的枠組みを再構築する。視覚文化と聴覚文化の研究を当面の二本柱としつつ、五感の編成と秩序の総体に迫ることを最終的な目標とする。その際、感性・感覚をめぐって哲学、美学、諸芸術学、心理学、サブカルチャー研究、メディア研究などが今日までに蓄積してきた学問の成果を最大限に活用するばかりでなく、社会学、生物学、文化人類学、人間工学、医学といった隣接する（しうる）学問領域とも積極的に協同していく。